

宮城県桃生郡河北地区文化財調査報告 第1集

# 和 泉 沢 古 墳 群

—宮城県桃生郡河北町所在—

昭 和 47 年 10 月

河北地区教育委員会

# 和 泉 沢 古 墳 群

# 序

当教育委員会では、先に『ふるさとの文化財』と題する地区内文化財の写真集を発刊いたしましたが、その調査の段階で河北町中島和泉沢地内の山林に石を積んだ古墳らしいものを発見しました。

その後、東北大学名誉教授伊東信雄先生や岩手県文化財専門委員司東真雄先生の現地視察をいただき、古墳群であることの確認を得ました。

しかも、北上川下流域に残る極めて貴重な古墳群であり、海道の古代文化を解明する上で学術的に注目すべきものであることもわかりましたので、その性格を明らかにするとともに、記録保存と現状保存上適切な措置をとるための調査を計画し、この指導を宮城県教育庁文化財保護室に仰ぎました。

幸いにも、文化財保護室調査係長志間泰治先生並に宮城県古川高等学校教諭佐々木茂楨先生に発掘調査をお引き受けいただき、その献身的な御努力により予定した学術調査を終了し、ここに報告書を発行いたすことになりました。広く御活用いただきたいと存じます。

尚、本調査の和泉沢古墳群のほかに、桃生町山田、河北町合戦谷、北上町月浜にも古墳が確認され、北上川流域に位置する当地区の古代文化の性格を明らかにする上で、極めて貴重な成果が得られたものと喜びにたえません。

この調査をまとめるにあたり、御指導と御援助をいただきました関係機関の方々をはじめ、炎天下の発掘に御協力をいただきました数多くの方々の御労苦に対し厚く感謝の意を表するものであります。

昭和47年10月

宮城県桃生郡河北地区教育委員会

教育長 濱田九重郎

## 目 次

序文 宮城県桃生郡河北地区教育委員会教育長 濱田 九十郎  
本文 宮城県吉川高等学校教諭 佐々木 茂 槟

1. 和泉沢古墳群の位置	3頁
2. 調査にいたる経過	3
3. 調査の経過	5
4. 調査古墳の状況	7
イ. 6号墳（墳丘・内部構造・出土遺物）	7
ロ. 10号墳（墳丘・内部構造・出土遺物）	8
ハ. 15号墳（墳丘・内部構造・出土遺物）	9
5. 和泉沢古墳群をめぐる諸問題	11
6. むすび	16

## 図 版 目 次

図版 1 和泉沢古墳群付近空中写真	19頁
図版 2 和泉沢古墳群の立地（その 1）	20
図版 3 和泉沢古墳群の立地（その 2）	21
図版 4 古墳群の現状（その 1）	22
図版 5 古墳群の現状（その 2）	23
図版 6 古墳群の現状（その 3）	24
図版 7 6号墳の状況	25
図版 8 10号墳の状況	26
図版 9 15号墳の状況（その 1）	27
図版10 15号墳の状況（その 2）	28
図版11 15号墳遺物出土状況	29
図版12 和泉沢古墳群出土遺物	30
図版13 北上川下流沿岸の古墳	31
図版14 和泉沢古墳群周辺遺跡出土の遺物	32

## 挿 図 目 次

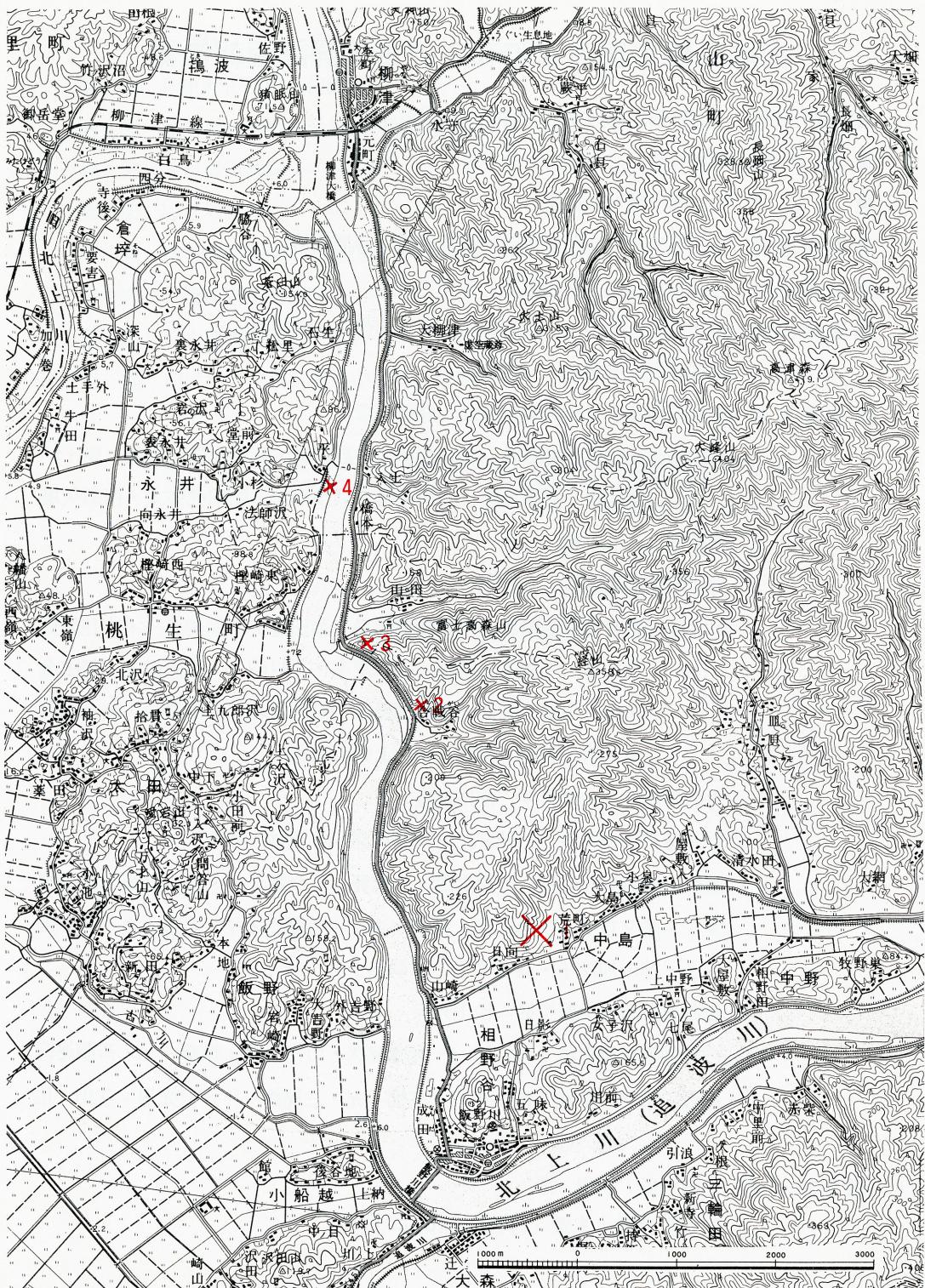
第1図 和泉沢古墳群の位置	2頁
第2図 和泉沢古墳群 6号墳～21号墳配置図	33
第3図 6号墳実測図	34
第4図 10号墳実測図	35
第5図 15号墳実測図と石室位置図	36
第6図 15号墳石室実測図	37
第7図 出土遺物実測図	38
付図 和泉沢古墳群各古墳の現状と分布図	6

本書に掲載した地図および空中写真は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の  
5万分の1地形図「登米」および2万分の1空中写真を複製したものである。

(承認番号) 昭47, 第6594号

# 宮城県桃生郡河北町和泉沢古墳群調査報告書

1. 遺跡の所在地 宮城県桃生郡河北町中島字和泉沢57の1
2. 調査期間 昭和47年7月24日～8月3日
3. 調査主体 河北地区教育委員会
4. 調査指導者 宮城県教育庁文化財保護室調査係長 志間泰治
5. 調査担当者 宮城県古川高等学校教諭 佐々木茂楨
6. 調査補佐員 東北学院大学学生 高倉敏明・河東田俊一・新沼秀二  
宮城教育大学学生 太田昭夫
7. 調査参加者 宮城県教育庁文化保護室技師 藤沼邦彦  
河北地区文化財保護委員 立花改進・狩野善夫・紫桃正隆・伊藤 泰・伊藤長政・高橋良記・及川健吉・武山梅玄・館田虎弥太・西条久雄  
前委員 八木 純  
河北町史編纂委員 山内栄一  
河北地区教育委員会管内小中学校教職員 説田雅夫・渥美勇一・立花繁信・  
鈴木衡一・鈴木幸次郎・大森定幸・戸村昭子・岡田信夫・阿部金  
次郎・角張てる子・曾我部昌子・西条忠幸・門間真伍・佐々木範  
夫・鈴木恒憲・高橋 和・上野広太郎  
宮城学院女子大学学生 松川美波  
宮城教育大学学生 三浦好江・斎藤智恵子・真砂まゆみ  
飯野川高等学校生徒 門間次郎・小松賢二・今野公一・武山秋穂・神山恵  
美子・勝又京子・伊藤忠子・高橋とみ子・首藤つる子・高橋もり・池田美  
規子・神山加津子・高橋範子・西城祐子  
仙台第一高等学校生徒 松川秀夫  
石巻高等学校生徒 大江伸一・後藤健次・山内茂樹・後藤 元・斎藤達彦・  
飯野川中学校生徒 横山正明・高橋 充・三浦修一・戸村光男・江川 広・  
大滝 桂
8. 調査協力者 高橋利男・水沼 清  
河北町役場土木課（古墳群分布図の作成）



第1図 和泉沢古墳群の位置（国土地理院発行「登米」）

- 1. 和泉沢古墳群（河北町）
- 2. 合戦谷古墳（河北町）
- 3. 山田古墳（桃生町）
- 4. 大日影古墳（津山村）なお他に北上町月浜古墳がある

（承認番号昭47、第6594号）

## 1. 和泉沢古墳群の位置

和泉沢古墳群は、国鉄石巻線鹿又駅の北東約9.5Km、宮城県桃生郡河北町中島字和泉沢57の1番地内に遺存している約50基程の高塚群集墳である。現状は高橋利男氏所有の雑木・竹林内にある。

大河北上川は、本吉郡津山町柳津のところから西流する旧北上川と分かれて、国道45号線(一の関街道)沿いに真すぐ飯野川町へ南流すると、ここで大きく東にL字状のカーブを描いて追波湾に流れ注ぐ。

この北上川の東部全域に広がる北上山地の大丘陵が、北上川の流域に南面して落ちこむ先端部分をしめて、河北町中島地区の集落が営まれている。和泉沢という字名の部落も、こうして北に山を背おう丘陵の先端部をしめて位置している(図版1~3、第1図)。

和泉沢の北方2.5Kmには、標高358.6mの経山が聳え、北西1Kmのところにも標高273mの高山があるが、古墳群はそれから派生する丘陵南斜面の先端部に築造されている。

桃生郡内で、これだけの高塚群集墳が現在もなお残っている例は他に知られていない。この種の古墳を周辺でさがすと、桃生町山田古墳、河北町合戦谷古墳の他に、北上町月浜にも数基存在することがわかった(図版13)。

## 2. 調査にいたる経過

和泉沢古墳群についての記録として古いものは、桃生郡旧二又村の書記から宮城県の初代県会議員に選出された保理文之允が、大正2年に筆写した『桃生郡北方馬鞍中島相野谷村誌』第二編(仙台 保理大三郎氏蔵)に、次のようにみえているものであろう。

### 墓

古墓 村ノ西方塚崎山ノ麓字臺ニアリ安政四年丁巳ノ年廿四日舊貫ノ土族河田瀬織第宅ヲ建築為サント地ヲ平均セン所一ノ荒蕪ヲ穿チ巨石ヲ見ル。奇トシ益々是ヲ穿ツ事三四尺許石ヲ以テ四隅ヲ囲ム。悉ク石ヲ撤スレバ中ニ一口の古剣アリ。其状近世ノ製造物ト異ナリ。又其傍ヲ穿ツ事前ノ如クス。中ニ一小剣ト下ニ図スル如キ鉄器ヲ得タリ。三品共ニ河田氏是ヲ藏ス。皆千載ノ舊物ナリ。是何人ヲ埋葬セシ墳墓ナルヤ記録セル物ハナシ。里老ノ口碑ニモ傳ハラザレバ其實ヲ知ル能ハズ。然レドモ碌々タル庸人ヲ葬リタル墓ニアラズ。剣ノ形状ハ飯野山神社ノ神寶と彷彿タリ。

附テ日ク(古事記)ニ伊邪那岐命ノ御刀ヲ伊都之尾羽振ト称シ(萬葉集)ニ尾張ノ國ノ冠辭ヲ劍太刀ト係ケルヲ以テ勘考スレバ上古ノ劍ハ鋒廣ク鍔際狭迫ノ物ナル可シ。飯塋山神社ノ寶劍ト形状能ク古典ノ辞ニ叶フ。

との記載に続けて、三品を図示している。この中2点は古剣、1点は鉄器である。剣の方の長いものについては「長サ1尺九寸鋒1寸五分、柄四寸頭ニ丸穴アリ、厚サ二分余鈔ハ剣ト共ニ造ル」と注記され、短剣の「長サ七寸三分、鋒一寸余、柄六分厚1分余、鈔孔共ニナシ」、鉄器「長サ1尺4寸幅三分厚サ二分余、此鉄質ハ上件ノ二品ヨリ新シク見ユ」と注がつけられている。「飯塙山神社ノ寶剣」とは蕨手刀である(図版14-5)。記事の中、「鉄器ヲ得タリ」とあるのは、図をみると剣のようにも考えられるが、断言はさしひかえておきたい。

塙崎山ノ麓字臺というものは、高橋利男氏宅のあたりであり、今日でも高橋氏宅は「臺の家」と呼ばれているので、ここで述べられている墓が和泉沢古墳群中の古墳であることは疑いがない。

その後、明治29年9月5日、現在の高橋氏の宅地内でやはり鉄剣が2点出土し、今に伝えられている(図版12-7、第7図の8・9)。これも蕨手刀で先代が開墾中に古墳を掘りおこしたらしい。

以上のことがらは、和泉沢古墳群が、折にふれてその数が減らされてきたことを物語っている。現在では、高橋氏宅に続く裏手の山、雑木竹林の中に東西130m、南北90mほどの範囲にわたって約50基が残っているにすぎないが、以前はもっともっと多かったことが推察される。

しかし、これらの遺跡に关心を寄せる人々は、あまりいなかったようである。そのため、この古墳群の存在は、今まで長い間学界にも報告されることがなかった。

というのは、古代史学の泰斗として令名をはせている喜田貞吉博士は、大正11年の11月桃生地方の古代遺跡を数日間にわたって視察され、それを「日高見地方(陸前国桃生郡)見聞録」としてまとめて発表されているが、その中に当地方の古墳として桃生町の山田や河北町の合戦谷所在の古墳についての記載はあるが、和泉沢古墳群については全くふれられていない。喜田博士は飯野川町にも来ておられるので、これだけの古墳群を案内者が話をしたならば、コース上からしても、おそらく博士の偉大なる足跡が当古墳群に及んだであろうと惜しまれる。なお、喜田博士の視察記事は最初大正12年2月発行の『社会史研究』第9巻第2号に掲載されたが、のちに大正12年3月、桃生郡教育会編の『桃生郡誌』にも全文が転載された。北上川下流域の古代史研究上、不可欠の文献である。

さて、ここ数年来、河北町では『河北町史』の編纂がはじまり、河北地区教育委員会を中心とする町内の文化財調査も多角的に行なわれるようになってきた(註1)。

そのような折の昨年6月、岩手県文化財専門委員司東真雄氏は、河北地区文化財保護委員会の招きで地区内の仏教文化の調査に来町された。その際、和泉沢の現地も訪れられ、積石石室古墳らしいとの見解をのべられると共に、数の確認など現状調査等についても指導されるところ

ろがあった。その年の暮れには、河北町史編纂委員長立花改進氏、委員の山内栄一氏らによつて、1基ごとに古墳番号を付した標柱杭が墳丘近くにたてられた。

こうして、本年1月には、東北考古学の権威者である東北大学名誉教授伊東信雄博士の現地調査となつた。教育委員会の招きで現地を視察された伊東博士は、北上川流域ことに岩手県にこの種の類例が多く、古墳時代後期の群集墳であることを指摘され、桃生地方の古代文化の解明上貴重な遺跡であることを強調された。

伊東博士の視察以来、和泉沢古墳群にたいする関心はとみに高まり、河北地区教育委員会・同文化財保護委員会では、遺跡を顕彰しその保存対策をたてるためにも、まず発掘調査を行なつて、その実態を把握する方向で事を進められた。

このような経過を経て、年度の当初に河北地区教育委員会を主体者とする調査を夏に行なう計画がたてられた。

調査は、教育委員会より私に依頼されたので、私が担当者となり、宮城県教育庁文化財保護室調査係長志間泰治氏の指導の下に調査団を編成し、47年7月24日よりこれを実施した。

### 3. 調査の経過

昭和47年7月17日、宮城県古川高等学校教諭佐々木茂楨は、河北地区教育委員会社会教育主事中島隆男氏、河北町史編纂委員山内栄一氏らと、発掘予定地の予備踏査を行ない、古墳群の広がりや保存の程度を検討すると共に、発掘古墳の対象を具体的に選んだ。その結果、6号墳・10号墳・15号墳の3基が立地条件や日程その他種々の点を検討して適當と判断し、これら3基をふくむ6号墳から22号墳の分布範囲約1,200m<sup>2</sup>の雑木・竹林を調査開始の日までの間に伐採してもらうことにした（図版4～6、第2図）。

7月24日、発掘調査用資材の運搬を行ない、午前10時、現場で古墳群の被葬者に対する供養が地主高橋利男氏を願主とし、曹洞宗天星寺小松賢孝師を導師として行われたのち、各古墳の発掘を開始した。

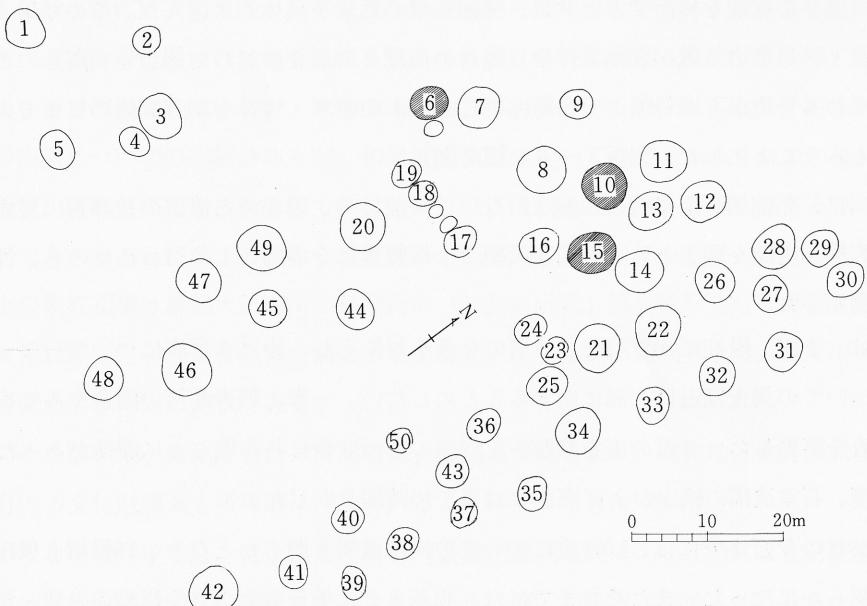
調査は、まず、最初に10号墳と15号墳の2基を対象とし、後に6号墳について行なつた。各古墳についての調査経過は次節にゆづることにしたい。一方、調査進行の間合をみて古墳群の分布調査を実施した（6頁の表を参照）。作業の進行度合は各古墳ごとに遅速があつたが、墳丘の実測、石室遺構の検出および実測には多くの時間をかけた。

7月28日の夕方までには、10号墳についての内部遺構も明らかとなり、15号墳も墳丘積石の全容が明らかになった。またそれまでには、両基ともに墳丘の大きさや周溝の有無、積石の状況や検出遺物による築造年代等についてのある程度のまとめをもつにいたつた。

和泉沢古墳群各古墳の現状

○印 発掘調査を実施したもの  
 △印 図版写真参照  
 (長径の単位はm)

号墳	長径	摘 要	号墳	長径	摘 要	号墳	長径	摘 要
1	5.2	保存良し	△18	3.2	未盜掘	35	4.0	盜掘
2	3.2	盜掘	19	5.2	"	36	4.0	未盜掘
3	6.0	盜掘小祠を建てるため手を加える	△20	9.0	" 保存良し	37	3.2	盜掘
4	4.2	未盜掘	△21	9.0	盜掘	38	4.0	未盜掘
5	4.8	"	22	8.0	未盜掘	39	3.2	盜掘
△⑥		盜掘	23	3.4	"	40	3.6	"
△7	5.8	"	24	5.2	" 保存良し	41	3.6	未盜掘
△8	2.8	未盜掘	25	9.0	" 保存良し	42	6.0	"
9	3.4	"	26	6.0	" 保存良し	43	4.0	"
△⑩		盜掘	27	5.0	盜掘	44	4.8	"
11	6.0	未盜掘	28	5.6	未盜掘	45	3.8	"
12	9.0	"	29	5.0	"	△46	7.2	未盜掘 保存極めて良し
△13	5.6	"	30	5.0	盜掘	47	6.0	盜掘
△14	9.0	盜掘	31	5.2	"	48	5.0	未盜掘
△⑯		未盜掘 保存良し	32	5.6	未盜掘	49	6.6	未盜掘 保存極めて良し
△16	5.4	盜掘	33	5.0	"	50	6.3	盜掘
17	3.2	未盜掘	34	6.2	"			



和泉沢古墳群分布図 (6・10・15号墳を発掘調査した)

そこで29日午後、調査途中であったが、調査指導者宮城県教育庁文化財保護室調査係長志間泰治氏の来跡を待ち、現地説明会を行なった。この説明会は地元住民および報道関係者等を対象として行ない、調査の成果と見通しおよび和泉沢古墳群の学術的価値と保存の意義について発表し、その普及につとめた。

10号墳の実測が終了するのをまって6号墳の調査にかかる一方、15号墳の墳丘積石の実測に全力をあげた。それも30日までは終了したので、いよいよ石室遺構の検出にかかった。6号墳についても墳丘裾部の調査の方が竹木の根に妨げられて難儀した。

こうして8月2日の夕刻までかかって、調査の行程を一応終えた。その後、8月15日および10月9日の両日に補足調査もかねて、和泉沢古墳群周辺地域における古墳の現地調査を行なった。その結果、従来知られている山田・合戦谷所在古墳の他に月浜でも古墳を確認した。

今回の調査は、幸いにも連日の好天と人に恵まれた。この調査に参加された数多くの方々の総力がここに結集された。

調査の間、河北町長横山崇氏の2度にわたる現地視察をはじめ町当局の方々、また石巻教育事務所長大迫進氏など多くの方々が来跡された。更に、調査終了後の8月10日には、岩手県文化財専門委員司東真雄氏、北上市史編纂委員沼山源喜吉氏らが来跡された。

#### 4. 調査古墳の状況

調査したのは、現存古墳群の中心部にあたるところの3基で、6号墳・10号墳・15号墳である(第2図)。このうち、6号墳と10号墳は既に盗掘をうけていた古墳であり、15号墳が今回発掘を実施した古墳である。以下に各古墳の状況を述べる。

##### イ、6号墳(図版7・第3図)

###### 位置と墳丘

調査のため雑木林を刈払った区域内では、北西端にある。昭和47年1月、伊東博士に従って本古墳群を踏査した際に、石室が露出して既に盗掘を受けたものであることを確認している。本来の墳丘は、中央部の盗掘でひどい破壊をうけているが、調査の結果、砂岩の割石を墳丘断面が半円径状に積みあげたものであって、若干粘板岩も混じっている。平面形は橢円形で長径4.6m、短径4.2m程を計測する。

###### 内部構造

砂岩の割石を平面形で長方形状に小口面をそろえて積み上げたもので、いわゆる積石石室古墳である。石室の方位は、北を51度西にふっている。盗掘の厄にあっていて、オリジナルな

石室の大きさは正確を期しがたいが、現存部での長さ1.9m、幅は中央部で0.92m前後、高さも中央部で0.36mを測ることができる。奥に縦0.65m、幅0.46m程度の立石がある。

石室の構築方法をみると、まず最初に地所を定めて床面を水平状にならし、石積みをする範囲をきめ、その後で割石の小口面をそろえて壁面として積み重ねている。同時に奥にも立石を据えたものとみられるが、この奥石は形式的にそえられているといった感がつよい。奥石の前面には東西の側壁に支石が据えられたものらしく、それが東側壁には現存している。対称の西の支石は盗掘の際に崩されて今はない。

#### 出土遺物

石室内の腐植土を取り除き、床面清掃中に、須恵器の壺で底部に回転糸切り痕のある破片が1点検出され、また墳丘裾部から須恵器の甕体部小片が出ている（図版12の3のハ・6のイ、第7図の3）。

#### 口、10号墳（図版8、第4図）

#### 位置と墳丘

6号墳の東へ25m程のところにあり、15号墳の中心部より北へ10mのところがこの古墳の中心部となる。すでに墳丘中央部から石室内の前半分にかけて大々的な盗掘が行なわれているが、本来は断面が半円形状に割石を積みあげて墳丘を築いたものと推定される。調査以前の平面形は円形で、その径は3.2m程であったが、裾部まで墳丘を追求して精査したところ長径5.6m、短径3.7mの卵形状の楕円形プランを有することが判明した。墳丘の高さは、盗掘坑によって不明である。

積石の状況をみると、この古墳には1抱大の石が多く使われて基本設計がなされており、その上に小さな砂岩がのせてある。墳丘を丘陵の傾斜面に築くための配慮と考えられる。

いっぽう、墳丘の中央部を中心にして、周辺探索のためのトレンチを放射状に入れた。このトレンチは杉の立木やその他の木根に防げられて南と西の2方向にしか入れることができなかったが、周辺の存在を示す地山面の変化は全くみられなかった。盗掘坑に投げ込まれている割石と腐植土を順次除去しながら調査を行なったところ、やがて石室遺構を発見した。

#### 内部構造

10号墳の内部主体も割石を積んだ石室である。石室の方位はN53°Wであった。石室は、東側壁の前方半分および南側がひどい盗掘を受けて破壊されているが、長さ3.7m、幅は北端で0.39mと狭く、中央部で0.94mを算する。高さは北端で0.3m程、中央部では0.54m程度の高さにまで積石が行われている。平面プランは、奥壁およびそのすぐ手前の側壁部分が若干狭

いが、概してやや胴張り気味の長方形形状を呈するもようである。石室の北端には高さ約0.31m、幅0.45m程度の立石が置かれ、そのすぐ手前の天井には長さ0.9m、幅0.54mのものの他に長さ0.75m程度の天井石が三枚架構してあった。天井石と認められるものは、その前の石室内後半分にもみられたが、それらはすべて崩れ落ちていった。

側壁についてみると、これも割石を小口面が揃うように積み重ねたものであり、西側壁には奥の立石より手前へ2.3mのところに、長さ0.6m、一辺が0.1m程度の柱状の立石がある。これは本来この位置に対称して東側壁にもあったと考えられるが、東側壁の対応部分が大きく破壊されていて不明である。この立石の位置やそれを境にして、奥と手前との石室幅の変化などを考慮すると、いわゆる玄門にあたるものと考えられる。樋石などの存在の有無は現状からは不明である。

石室の床面上に、他の例によくみられる礫石が敷いてあったかどうかも、盗掘時の攪乱もあってわからない。

#### 出土遺物

10号墳出土の遺物としては、わずかに須恵器坏片1点と壺の小破片5点があるにすぎない。坏は回転糸切りの平底を有するものである（図版12の3のロ・6のロ、第7図の2）。

#### ハ、15号墳（図版9～10、第5～6図）

##### 位置と墳丘

今回正式に調査を行ったもので、和泉沢古墳群全体の中においても、墳丘の原形を比較的よくとどめている部類に属している。10号墳のすぐ南に接し、14号墳が東に16号墳が西にある。

調査前の状況は、長径2.3m、短径1.8mの楕円形状を呈し、南北稜線が高く一見屋蓋状をなし、高さは中央部で0.6m程度を算していたにすぎない。墳丘表面には砂岩の割石が多数露出していたが、部分的に黒色腐植土が流入して雑草がおおい、墳丘裾部では雑木も数本生えていた。

墳丘上部を清掃するとともに、裾部の確認につとめたところ、墳丘プランは10号墳と同様に、鶏卵を横位に置いたような楕円形状を呈するものであることが判明した。長径5.9m、横径が中央部で4.2m、それより前の方がやや広がって4.85mを計測する。中央部での墳丘の高さは1.1mである。この結果を調査以前の段階と比較してみると、裾部が相当の土砂をかぶって埋没していることが観察された（図版9の2、第5図）。

さらに、墳丘の積石状況をみると、これも北方の山地から一気に傾斜する丘陵斜面に築造

されているので、南半分ほど積石が多く、大きい長石などが使われている。

また、墳丘中央部を中心にして、周辺探索のためのトレンチを長さ8m、幅1.5m程度で3本、北と西と東南方向に入れた。このうちで北方向のトレンチは、10号墳と15号墳の位置関係からみて、そのまま10号墳の南側の周辺探索のためのトレンチともなるものである。

その結果、現地表面から深さ0.4~0.5mほどで地山面があらわれたが、トレンチ内では全く攪拌黒褐色土のようなものはどこでもみられず、周辺は存在しないことを確認した。

墳丘の積石状況を実測すると共に写真撮影を行ない、墳頂から順次割石積をはずして石室の調査にかかった。

### 内部構造

15号墳の内部主体もこれまでの2基と同様に、割石を積んだ石室である。石室の方位はN 47°Wであった。石室のプランは長方形をなし、長さ2.6m、幅は0.6m、高さは0.5mを算している。石室の奥には、高さ約0.35m、横幅0.5m程の石が横長に置かれていた。南端には、石室の入口を剛する底面に平石が置かれている。この平石は長さ0.95m、最大幅0.45mの砂岩であり、この平石を固定するためにそれよりいくぶん小さめの平石が更に3個その前方に置かれている。

この石室にあっても、長さ0.8m、幅0.4m前後の天井石が2枚架構した状態で残っており、他のは殆んど石室内に崩れ落ちていた(図版10)。また、石室の基底部が良く残っていたために、石室構築上の手法がうかがわえて注目される。すなわち、その観察に従えば、丘陵斜面を削り取って石室床面を水平にするための作業を行ない、奥石を中央に据え、この奥石の手前に割石の小口面を中央部分でそろうように積みあげ側壁としている。石室床面のレベルは周囲の裾部より高く設計されている。

側壁を構築する際としては、長さ0.4~0.47m、一辺が0.08~0.1m程度の柱状の長手の石が4本ほぼ左右対になるように両側壁に立てられ、その外側に側壁が積まれている。側壁最下段の割石底面よりもこの支石はさらに深く埋めこまれている。最終的に玄室内に天井部から落ちこんでいる石を取りはずして床面を精査したが、側壁立石間の床面にみられる仕切り石もないし、礫石敷なども認められなかった。

### 出土遺物

石室内東側壁の手前より第2番目の立石の近くから鉄斧と鉄鎌が各1点、更にその南の底部より黒色土師器壺1点、壺1点が破片の状態で出土したほか、須恵器の壺底部が石室南側近くから、甕の体部破片と壺片が墳丘の西側裾部から検出された(図版12、第7図)。

### 土師器

石室内から出土した土師器破片を水洗いの後に接合して復元したところ、小型の壺と坏をえた。壺は内外ともに黒色処理されており、ロクロで製作された後に、ケズリはよくわからないが、ミガキが施されている。器高は全体で7.9cm、底面の径5.5cm、肩部の径9.5cm、高さ1.2cm程の外反する口頸部がつき、口縁径は6.1cmほどである（図版12の1，第7図の5）。

坏は、器高4.3cm、復原口径14cm位。径5.5cmの底部で回転糸切り痕が明瞭に残っている。器内面は黒色処理されたのちに、底部を放射状に、体部から口縁部は横位にヘラによるミガキが施こされている（図版12の2，第7図の1）。

### 須恵器

石室内から出土したものは、回転糸切り痕の残っている坏底部片である。全然調整はなされていない。やや内湾気味に立ちあがる体部がつくが口縁部まではない（図版12の3のイ、第7図の4）。

墳丘の西側裾部で発見されたのは、甕体部の破片で計13点ある。共に0.5cmから0.7cm程度の厚さがある。内面には青海波文などのたたき目は全くない（図版12の4）。

坏も体部小片で、甕と共に、全体の大きさは不明である。

### 鉄製品

#### 鉄斧

石室東側壁床面上より出土した。長さ14.8cm、最大幅は刃部付近にあり、6.0cmを測る。上方には袋状の木部挿入穴があり、その横断面形は横に長い橢円形を呈する（図版12の5，第7図の7）。

#### 鉄鎌

断面方形状のもので、現存の長さ4.2cmである（第7図の6）。

## 5. 和泉沢古墳群をめぐる諸問題

以上で今回調査した古墳群についての概略を終えるが、これらの古墳をめぐるいくつかの問題について、まとめてみたい。

第1、群集する古墳の外形についてみると、それは砂岩の割石を主体としてこれに若干の粘板岩をまぜながら積み上げて墳丘を形成している。しかも注目すべきことに、10号墳も15号墳も、墳丘をめぐる周溝は無い。時間的にも作業的にも、6号墳についての周溝は確認していないし、現存の50基に近い残りの古墳についての調査もしていないので、この点を和泉沢古墳群全体にまで拡大していくことは出来ない。しかし、それはそれとしても、周溝を欠く古墳の存

在を特徴の第1点にあげうるであろう。

第2、封土について、今回初めて調査した15号墳の例でいうと、調査時の墳丘表面に積石が露出し、裾部を除いて堆積土はほとんどみられなかった。部分的に墳丘上に草の茂っている腐植土のたまたま所がいくつかあるけれども、封土といえるような状態ではない。これに、周溝がないという調査事実を加味し、盛土のために周溝をつくり、切り盛りの所作がそのまま一方で周溝であり、他方に盛土となるというようなことを考えてみると、15号墳は築造の当初から盛土が無かったのではないかとも考えられてくる。

しかし、周溝を掘ってないことについては、古墳の立地条件が傾斜面で、排水を考えての所作ともみられなくはないし、墳丘についても、それを覆う土を周溝以外の他所から運ぶこともありうるだろうから、周溝の欠如がそのまま封土を欠くことにはならない。この傾斜面上の古墳の封土では、長年にわたる出水時の流失も考慮する必要があろう。

第3、墳丘の積石についても、この傾斜面と関係する作業上の配慮がみられる。これも15号墳が好例となる。これにあっては、石室の床面の水平を保つために整地して前方部に土を盛り、その土をおさえるために大きな石を使用しながら積み石を行なっている。15号墳や10号墳の墳丘プランが卵を倒置した形状に近いのは、丘陵斜面に石を積む所作にもとづくところが大きいのではないか。また、積まれている石が割石であることは、附近に河原石を得がたいという条件によることもさることながら、斜面での安定性の面では丸い河原石よりはるかにすぐれているといえるであろう。

第4、内部構造について、調査した3基の構造をいうと、地山面に割石を小口積にして細長い長方形の石室をつくる。石室の奥には奥石を3基ともに有し、6号墳～15号墳の側壁には、左右対になる支石がみられる。天井石は、保存の良い15号墳でも天井に架ったままの位置にあったのは2枚だけであり、ほとんど石室内に落ちこんでいた。その天井石も、奥石も普通の古墳時代後期の横穴式古墳の天井石にみられるような大形の石は使用されておらず、石室周囲の石と同じぐらいのものである。

このような内部構造で注目されるのは、宮城県北から岩手県中部の地方にかけて多くの類例を見る後期古墳との関連性である。

積石石室をもつ古墳を宮城県北であげてみると、それは鳴瀬・荒雄川流域の大崎地方にある

加美郡色麻村色麻古墳群（註2）

古川市日光山古墳群（註3）

古川市塙原古墳群（註4）

などであり、岩手県のものとしては、

西磐井郡花泉町杉山古墳群（註5）

和賀郡江釣子村五条丸古墳群（註6）

同村猫谷地古墳群（註7）

花巻市湯口熊堂古墳群（註8）

盛岡市太田蝦夷森古墳群（註9）

などがある。

いま、これらの古墳群との類似点をあげると、同形同大の古墳が群集している点、積石石室をもつ点、石室の奥壁に立石を有する点などを指摘することができる。

しかし、そうはいっても全く同じでなく、以下に述べるように、相当な違いが和泉沢古墳群との間にはある。ことにその相違は、宮城県北の大崎地方の後期古墳群との比較において顕著である。

すなわち、色麻古墳群や日光山古墳群など鳴瀬、荒雄川流域にある古墳群をみると、和泉沢古墳群とは異って、石室は玄室と羨道が明確に区別されており、全体に大きく高い。奥壁に据えてある石も2抱えも3抱えもある堂々たる巨石が使用されていて、横穴式石室としての実用的な機能が十分果されたことが考えられる。

これに対して、和泉沢古墳群の石室にあっては、玄室と羨道の区別が明確でなく、石室も小さく低いし、奥石なども大崎地方のそれの比では全然ない。大崎地方の例えば日光山古墳群支群小寺団5号墳（註3）の奥石というのは左右の側壁と深い関連性があり、機能的にこの奥石が崩れれば、左右の側壁も一斉に崩壊するという関係があるものである。しかるに、和泉沢古墳群にあっては、奥石は側壁と機能的につながるものではなく、よしんば奥石を取りはずしたところで側壁崩壊とはならないものである。丹念な作業が奥石を立てる場合に行なわれてはいない。それは添えかけられたとでもいえそうなものである。

本古墳群の10号墳や15号墳にみられる長方形の石室プランや側壁にみられる支石などは、長楕円形のプランをなす大崎地方の古墳群にはみられないものである。これらの諸点を総合してみると、和泉沢古墳群の構造は、鳴瀬・荒雄川流域の横穴式石室を内部主体とする古墳群からの影響を受けているかも知れないが、多分に型式的な模倣に終っているといえるであろう。

岩手県和賀郡の五条丸古墳群や猫谷地古墳群なども、調査の結果、宮城県北の色麻古墳群などの横穴式石室墳の様式をとり入れて、この地方で営まれた独自の古墳型式であろうことが指摘されている。

そういうえば、和泉沢古墳群の内部構造は、大崎地方の後期古墳群よりは極めて五条丸古墳群などとの類似点が多い。それは、型式的な1枚の奥石、低く小さい石室、側壁に立てられた対

になる数カ所の支石などに顕著である。この点では北上川流域の変形末期古墳のグループの1つとして一括できそうであるが、しかし、和泉沢古墳群と五条丸古墳群などとは、これも全く同じではない。

その1つは、10号墳と15号墳に関する限り周溝がなく、五条丸古墳は周溝が墳丘をめぐっている。第2に、和泉沢古墳群10号墳・15号墳にも、五条丸古墳群にみられるように側壁に支石はあるが、五条丸古墳群例のような支柱に添った枕石敷ではなく、礫石が石室内に敷かれた形跡も15号墳にはない。もっとも五条丸古墳群にみられた支柱を支える枕石敷は、河原石を使用している積石墳と関係することが考えられる。すなわち、例えば五条丸古墳群の23号墳の側壁の河原石の配列をみると、まず主軸に対して直角に小口を揃えて並べてあるが、その外側の河原石はそれとは逆に主軸に平行に積まれている。つまり、このような積石の仕方は崩壊しやすい河原石に対する配慮が考えられ、側壁の支石柱はそれを底面で更に支える横石と相まって、崩壊を防ぐ構築技術とみられる。

ところが、和泉沢古墳群の場合は、割石であり、はるかに河原石よりも安定性がある。そのため、側壁面に立てられた支石も現実には形式的であってよく、倒れる心配もほとんどない点からして、対をなす支石間をさらに床面で支えるための横石も必要であったのかも知れない。事実、側壁の割石の配列は全て一定方向であり、五条丸古墳23号墳のように主軸に平行しては積まれていない。

内部構造の相違が、時期的な遅速にかかるものか、あるいは地域的な違いなのか等々も今後の資料の増加をまって慎重に検討していかねばならない。地域的な相違といえば、宮城県境から岩手県へとまたがって分布する杉山古墳群（註5）の墳丘は、宮城県側は砂岩の割石なのに岩手県側は河原石の積石現象が概してみられることを、調査者の伊東信雄博士からお教いいただいた。

第5、次に築造年代について考えてみることにしよう。まず五条丸古墳群もしくは猫谷地古墳群から出土する土師器は、ロクロ使用のあとがないのに、15号墳出土の土師器は、内外黒色処理された壺にしても内面黒色の壺にしても、明確にロクロを使用して製作されている。そこで、五条丸古墳群の造営年代がほぼ8世紀に求められている点を加味して考察すれば、15号墳の造営はこれよりも後で、おそらく9世紀に入ることが考えられる。6号墳や10号墳についても、土師器は出土していないが回転糸切り痕をもち、全然調整されていない平底の須恵器壺が検出されているので、やはり9世紀の造営が考えられる。

このように、五条丸古墳群よりも遅いことの推定される和泉沢古墳群の築造は、やはりこの地域における政治的・社会の形成年代が、実質的に1段と遅くれていることに関連をもつもので

はあるまいか。五条丸古墳群の造営者については、8世紀の蝦夷の族長として、『続日本紀』の天平9年（737）4月14日条にみえる帰服の狄和賀君計安墨らによって代表される奈良時代の蝦夷の族長級の人々が推定されている。そこに8世紀段階の中央と和賀地方との結びつきを考えるのであるが、和泉沢古墳群の分布する桃生地方の場合は、はたしてどうであろうか。

第6、そこで最後に、古代における桃生郡の開拓といったものを文献でみてみよう。

桃生の名が国史上に初見するのは、奈良時代、8世紀の中葉の天平宝字元年で、『続日本紀』の同年（757）4月4日の条に、

勅曰…共有不孝不恭不友不順者宜陸奥國桃生…

とあるのがそれであり、『続日本紀』宝亀2年（771）11月11日条には、桃生郡の名がみえるので、それまでの建郡が知られる。

天平宝字年間といえば、藤原仲麻呂が中央政界に出て、積極的な奥羽開発政策を推進しようとしていた時期である。この段階ではじめて桃生の名が史上にみえてくることは、政府がその勢力を北上川に沿って北進させようと意図、計画していたことを物語っていよう。

桃生郡の地方は、本来は牡鹿郡内に含まれており、桃生建郡の直接的契機は天平宝字年間の桃生城の築造にはじまる。『続日本紀』の天平宝字4年（760）正月4日条には、その築造について、

於陸奥國牡鹿郡 跨大河凌峻嶺 作桃生柵 奪賊肝膽

とある。坂東の騎兵・鎮兵・役夫だけでなく陸奥国の浮浪人など数千人に達する膨大な人々の動員によって築造されたものであった。

そして、さらに『続日本紀』によると、神護景雲元年（767）10月15日条によれば伊治城が既に作了し、10月29日栗原郡がおかげ、翌2年12月16日条によると、陸奥管内及び他国の百姓の伊治・桃生に住せんと願うものは情願に任せて安置し、法によって復を給うことがある。また3年2月には、桃生・伊治の2城の營造已におわり、その土沃壤にして、その毛豊饒なりといい、勅して坂東8国の百姓の同地への移住をすすめているのであって、伊治・桃生の地の經營が順調に進みつつあったことを思わしめるのであるが、しかし、この時期から平安初期の奥羽の情勢は、一連の兵馬倥偬の間にあった。

『続日本紀』の宝亀5年（774）7月には、海道蝦夷の反乱によって、拠点桃生城が侵された。政府は直ちに按察使大伴駿河麻呂らをして、夷俘の巣窟たる遠山村（登米地方）を討伐せしめたが、胆沢攻略までになった延暦23年（804）正月には、桃生郡の西に隣する小田郡中山柵に坂東6国および陸奥國などから莫大な軍糧が運びこまれて桓武朝第4次の征討軍が計画されるなどしており、必ずしも安定した經營が展開したのではないことがうかがわれる。

果たせるかな、『続日本後紀』の承和4年(837)4月21日の条にも、  
自去年春至今年春百姓妖言 騒擾不止 奥邑之民 去居逃出 事須加添戍兵 静騒赴農……  
加以 栗原桃生以北俘囚 控弦巨多 似從皇化 反覆不定……

とある。9世紀の30年代にして、このような状態が桃生地方にはみられるのである。

かかる社会情勢といったものと、形式的な石室模倣の9世紀代の古墳群の造営ということは  
大きいに関連性があることなのではないだろうか。

それにしても、和泉沢古墳群の被葬者がいかなる階層に属する人々であったのか、背後には、  
どのような政治的・社会的形成があったのか等々は、今後に残された重要な研究課題である。

## 6 む す び

わが国第5位の長さを有する大河北上川は、東北地方の東部低地帯の北半を流れて全長243Km、流域に多くの後期群集墳が発達してみられる。いまそれらについてみると、岩手県だけでも10指を数える。宮城県に入っても登米郡中田町上沼化粧坂から岩手県西磐井郡花泉町永井杉山にかけて杉山古墳群があり(註5)、さらに川を下っては桃生郡河北町和泉沢古墳群を最大として、周辺に本吉郡津山町大日影古墳(註10)・桃生町山田古墳・河北町合戦谷古墳・北上町月浜古墳などがある(註11)。

これらの中で、従来発掘調査が行なわれたものは、岩手県和賀郡の五条丸古墳群(註6)、長沼古墳群(註12)、猫谷地古墳群(註7)など、岩手県側に多く、変形横穴式石室を内部構造とする積石古墳群として学界に発表されている。

それにひきかえ、宮城県側の古墳は、伊東博士によって調査された登米郡中田町化粧坂古墳群(註5)を除いては例がなく、ましてや北上川の河口に近い河北町内の古墳群についての調査は、正式には一度も行なわれていない。しかも、合戦谷古墳群は、喜田貞吉博士が「日高見地方(陸前国桃生郡)見聞録」の中でのべられているように、北上川の改修工事に伴って殆ん埋滅し、管見の限りでは残っているのはわずか1基だけである。

このような観点からみても、今回の和泉沢古墳群の調査結果は、北上川流域の後期古墳文化の具体的な展開に、いくつかの新しい知見を加えることになったと考えている。

今後さらにこの流域における古墳の分布調査と共に、本古墳群についても克明な調査が重ねられるならば、その歴史的意義もより一層解明されることになるであろう。

## [付記]

本稿を成すにあたっては、東北大学名誉教授伊東信雄博士より数々の御指導をうけ、本稿の御校閲も仰いだ。また、宮城県教育庁文化財保護室の志間泰治調査係長よりは、現場指導をふくんで終始懇篤なる御指導と助言をいただいた。

このほか、視察をいただいた岩手県文化財専門委員司東真雄氏初め沼山源喜治氏よりも御教示を賜わり、出土遺物の観察については、宮城県教育庁文化財保護室の氏家和典技術主査、宮城県多賀城跡調査研究所の桑原滋郎技師の両氏より種々の御教示をえた。さらに、調査に参加された高倉敏明・河東田俊一・新沼秀二・太田昭夫の四氏よりは、実測図の作成をはじめ、全般にわたって多大の助力をいただいた。ことに、高倉・河東田両氏からは、製図でも多くの協力を受けた。

これらの方々の学恩に対し、ここに深く感謝の意を表するものである。

なお、筆者は、本年10月1日、東北大学で行なわれた「昭和47年度東北史学会大会」において、本調査の成果について口頭発表を行なった。

## 註

1. この調査結果は、河北地区教育委員会から本年7月発行の『河北地区ふるさとの文化財・資料第一集』におさめられている。
2. 伊東信雄「宮城県加美郡上郷古墳」『日本考古学年報4』所収・昭和26年、古川市教育委員会『古川市塙原古墳群』・昭和45年
3. 古川市教育委員会『古川市日光山古墳群』・昭和47年
4. 古川市教育委員会『古川市塙原古墳群』・(前掲)
5. 伊東信雄「岩手県西磐井郡杉山古墳群」『日本考古学年報8』所収・昭和30年
6. 岩手県教育委員会『五条丸古墳群』・昭和38年
7. 田中喜多美・瀧口宏・中川成夫・桜井清彦・玉口時雄・菊地啓次郎「猫谷地古墳発掘調査報告」・『岩手史学研究第9輯』・昭和26年
8. 小笠原謙吉「熊堂古墳」・『岩手県史跡名勝天然記念物調査報告第二号』
9. 小岩末治「岩手県太田村蝦夷森古墳」『岩手史学研究第十八輯』・昭和30年
10. 本吉郡津山町大日影古墳については、伊東博士がすでに注意されている(本報告書図版13の1参照)。
11. 喜田貞吉「日高見地方(陸前国桃生郡)見聞録」『社会史研究第9巻第2号』、のち『桃生郡誌』所収)大正11~12年で山田・合戦谷古墳がとりあげられている。北上町月浜古墳は筆者が現地調査した。なお本報告書図版13を参照。
- また、「桃生郡太田村風土記御用書出」(『宮城県史26』所収)に古塚5つとして、照井塚4つ、日招塚1つとを書き出している。
12. 沼山源喜吉氏の教示により、本年夏調査されたことを知った。なお、『岩手日報』昭和47年8月21日付の記事を参照

# 図 版



図版 I. 和泉沢古墳群付近空中写真 (承認番号 昭47, 第6594号)

(2万分の1空中写真 T O - 69 - 5 X C 6 - 6



1. 河北町女子沢より和泉  
沢古墳群を望む  
(矢印・中央のテントの位置)



2. 和泉沢古墳群より七尾方  
面を望む



3. 和泉沢古墳群の立地傾  
斜面 (西より東を望む)

図版 2. 和泉沢古墳群の立地 (その 1)

1. 立地斜面  
(東より西を望む)



2. 積石は、10号墳（右）  
と15号墳左の墳丘



3. 積石は、10号墳（右）  
と15号墳（左）



図版3. 和泉沢古墳群の立地（その2）

1. 13号墳



2. 20号墳



3. 46号墳



図版4. 古墳群の現状（その1）

1. 7号墳



2. 8号墳



3. 18号墳(手前)と19号墳



図版 5. 古墳群の現状（その 2）

1. 14号墳



2. 16号墳



3. 21号墳



図版 6. 古墳群の現状（その 3）

1. 6号墳の立地 (矢印)



2. 6号墳の状況 (調査前)



3. 6号墳の石室と墳丘積石  
(調査後)



図版7. 6号墳の状況

1. 調査前



2. 調査後



3. 調査後



図版 8. 10号墳の状況

1. 調査前



2. 墳丘調査



3. 調査後



図版 9. 15号墳の状況（その1）

1. 天井石の架構状況



2. 墳丘と石室



3. 石室



図版10. 15号墳の状況（その2）

1. 鉄製斧 (図版12の5)



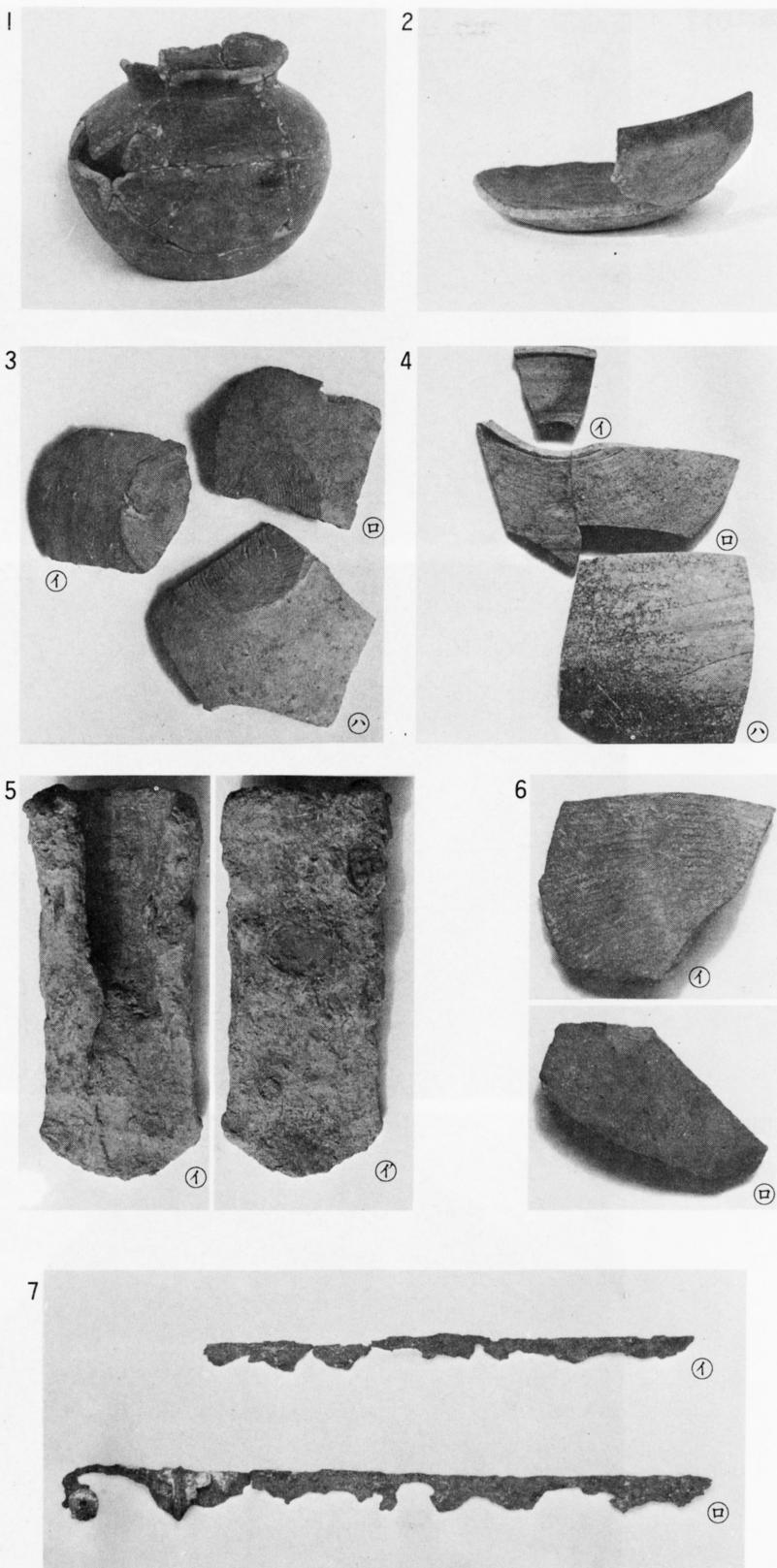
2. 土師器壺 (図版12の2)



3. 土師器壺 (図版12の1)



図版II. 15号墳遺物出土状況



図版12. 和泉沢古墳群出土遺物  
 15号墳出土（1, 2, 3のイおよび4, 5）  
 10号墳出土（3のロ, 6のロ）  
 6号墳出土（3のハ, 6のイ）  
 (但し7の鉄刀は明治29年発見)

### 1. 本吉郡津山町大日影古墳

北上川西岸の堤防の斜面に封土  
が残り、老杉が茂る(中央)

伊東信雄博士撮影



### 2. 月浜古墳

写真は北上町立月浜中学校の北  
後方の丘陵上にあるもの、なお  
この周辺に他にも数基ある。



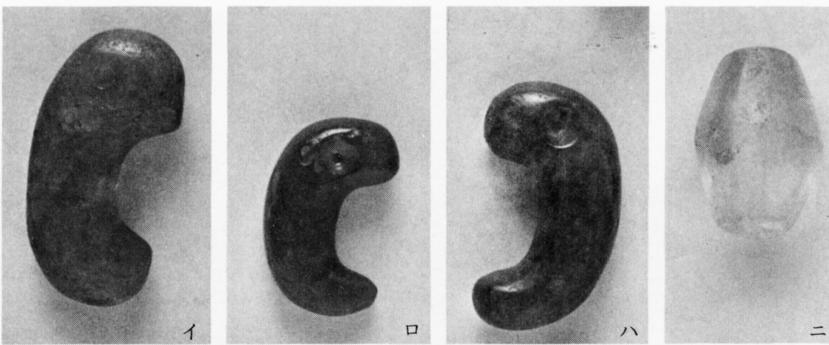
### 3. 合戦谷古墳

河北町合戦谷の立花西藏氏宅の  
裏手の山に残っている。

なお、図版14の2のイ(勾玉)お  
よび3のイ、ロ(鉄刀)を出土し  
た山田古墳群は犬頭山丘陵が北  
上川に臨む傾斜面に数基あった  
といふ。



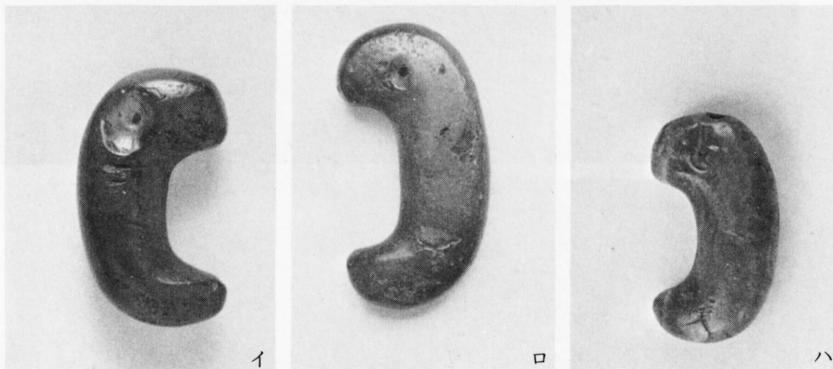
図版13. 北上川下流沿岸の古墳



### 1. 河北町合戦谷出土

メノウ製勾玉（イ～ハ）と水晶製切子玉（ロ）（立花忠信氏蔵）

勾玉は大正初年、同家の宅地造成の際壇の下闈（地名）より出土。切子玉は、昭和21年に同家の位置を移転する際に発見という。

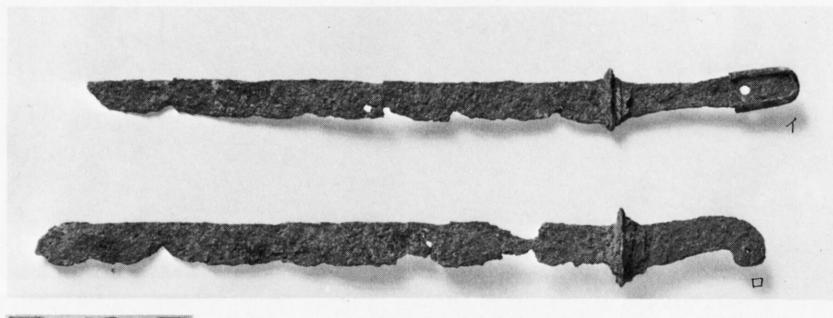


### 2. メノウ製勾玉

イ. 桃生町山田出土（守栄氏蔵）

ロ. 桃生町山田出土（桃生町公民館蔵）

ハ. 桃生町樺崎出土（桃生町佐々木恒平氏蔵）



### 3. 桃生町山田出土鉄刀と帶金具

（守栄氏蔵）

これらは上の2のイの勾玉とともに、明治7年に先代守清作氏が山田山の高道墓より100mほど上方の、梅ヶ迫塚を開墾したとき、掘りおこしたものという。

イ. 全長60.2cm

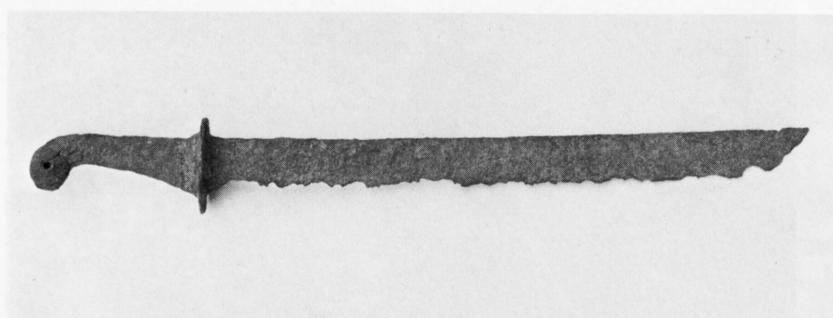
ロ. 全長61.0cm

ハ. 帯金具



### 4. 河北町合戦谷出土の鉄刀

（守栄氏蔵・全長31cm）



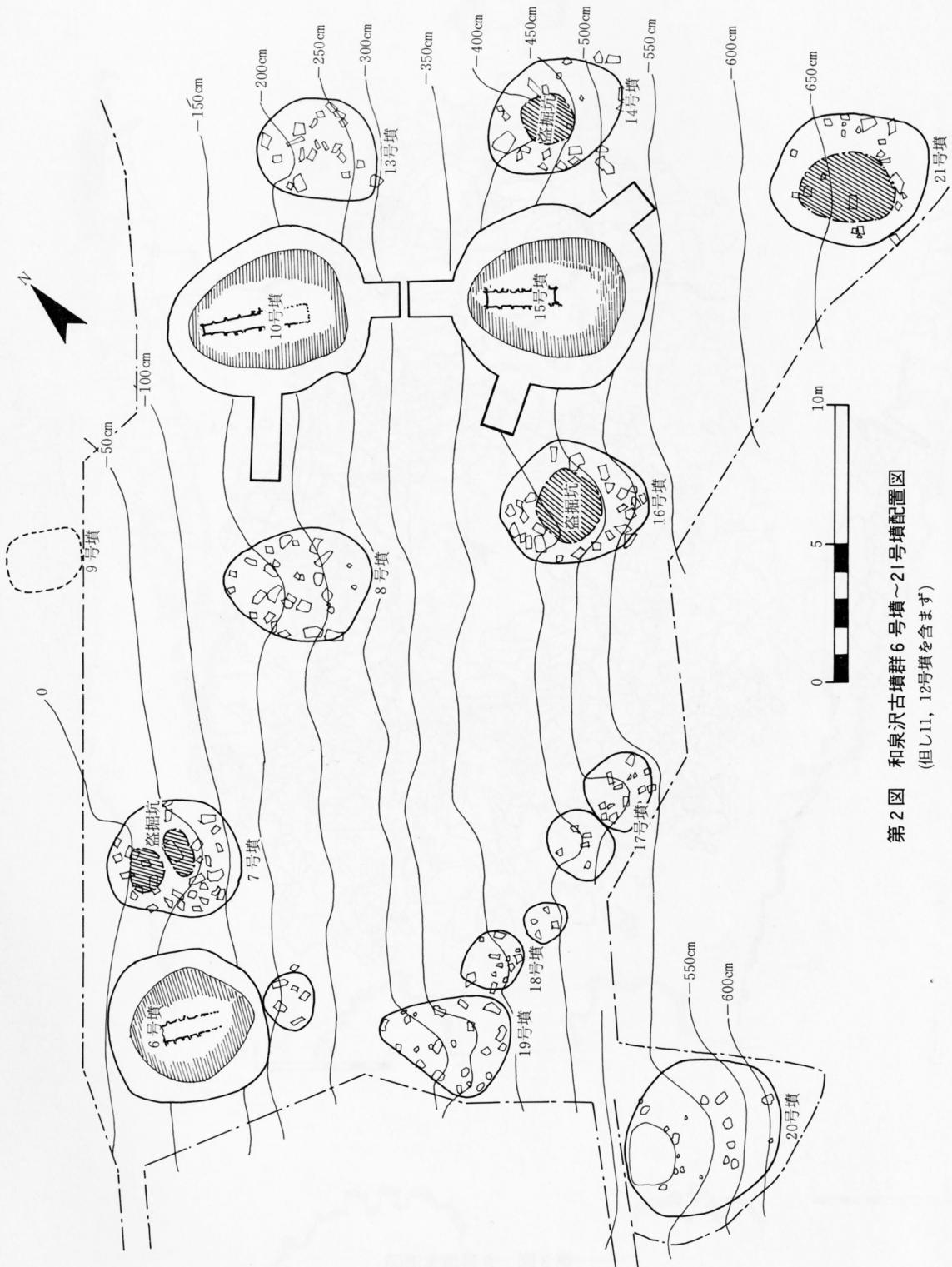
### 5. 河北町飯野本地出土、鉄刀

（飯野山神社蔵・全長59.4cm）

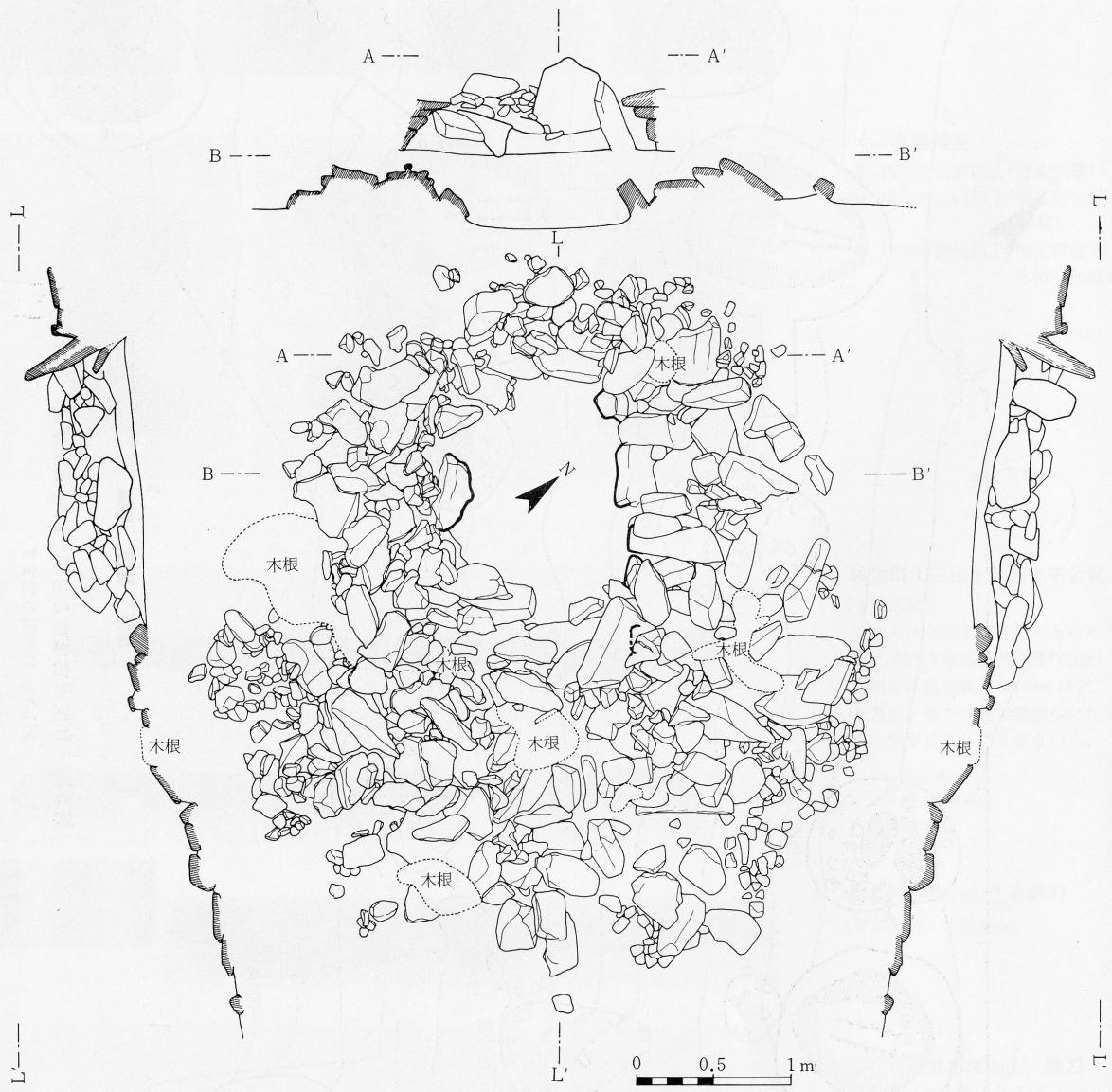
天明2年（1782）6月23日、旧飯野村東屋敷在住の百姓吉吉が同所の裏山より掘り出したものという。

初め光嚴寺に奉納せるも後に文政10年4月、飯野山神社に移し、現在にいたる。

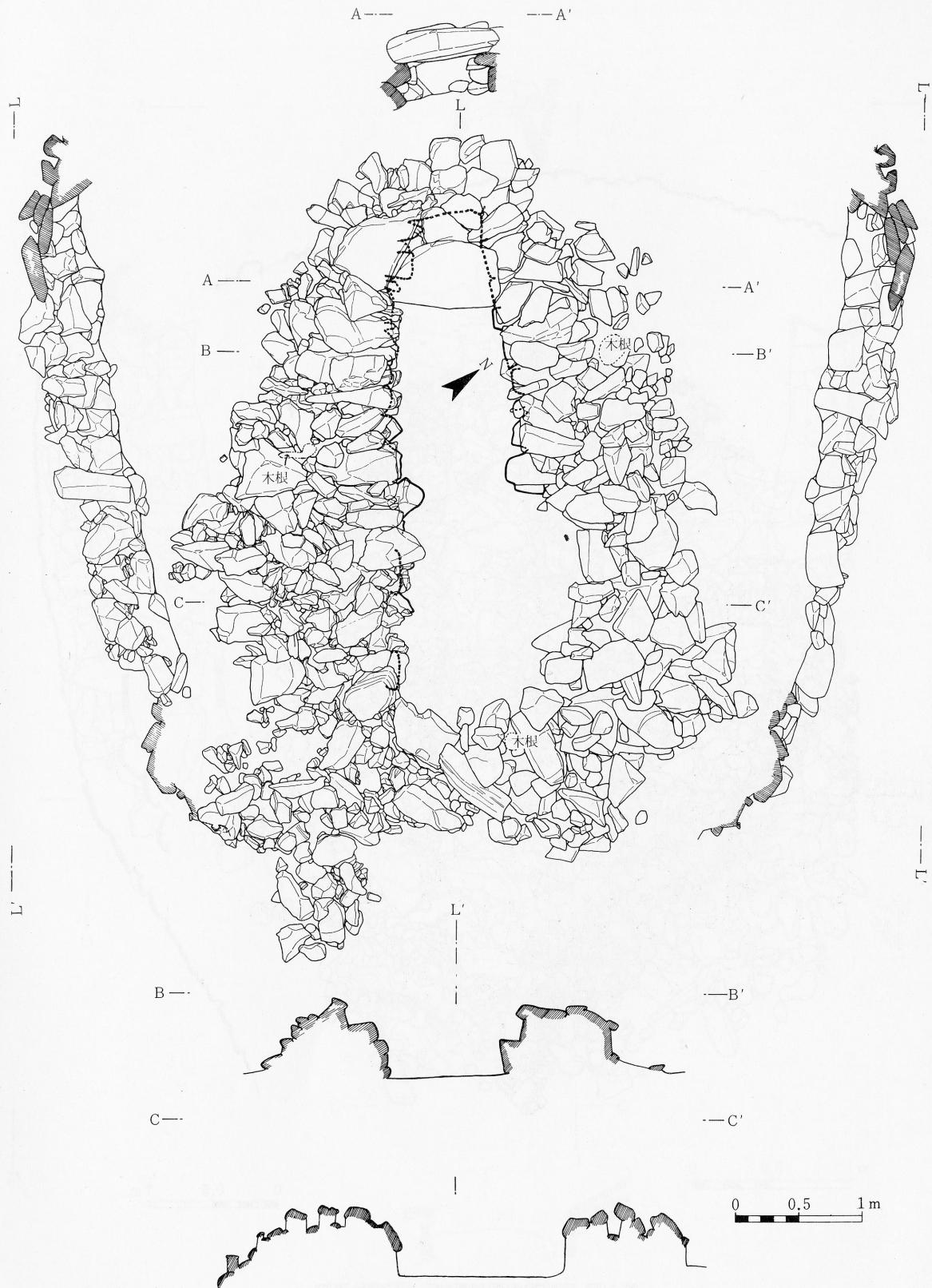
図版14. 和泉沢古墳群周辺遺跡出土の玉類・帶金具と  
鉄刀（玉類は原寸大）



第2図 和泉沢古墳群6号墳～21号墳配置図  
(但し11, 12号墳を含まず\*)



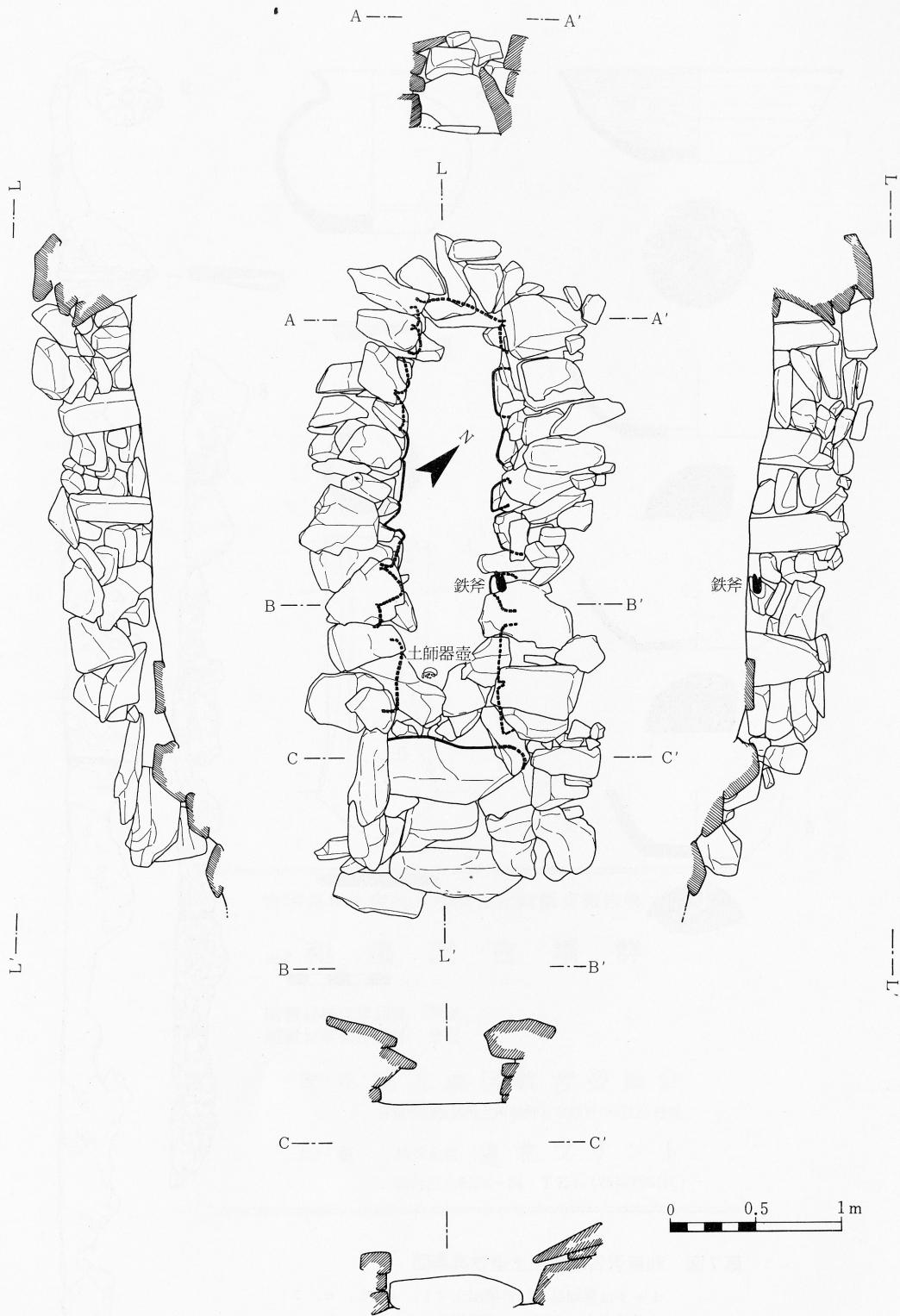
第3図 6号墳実測図



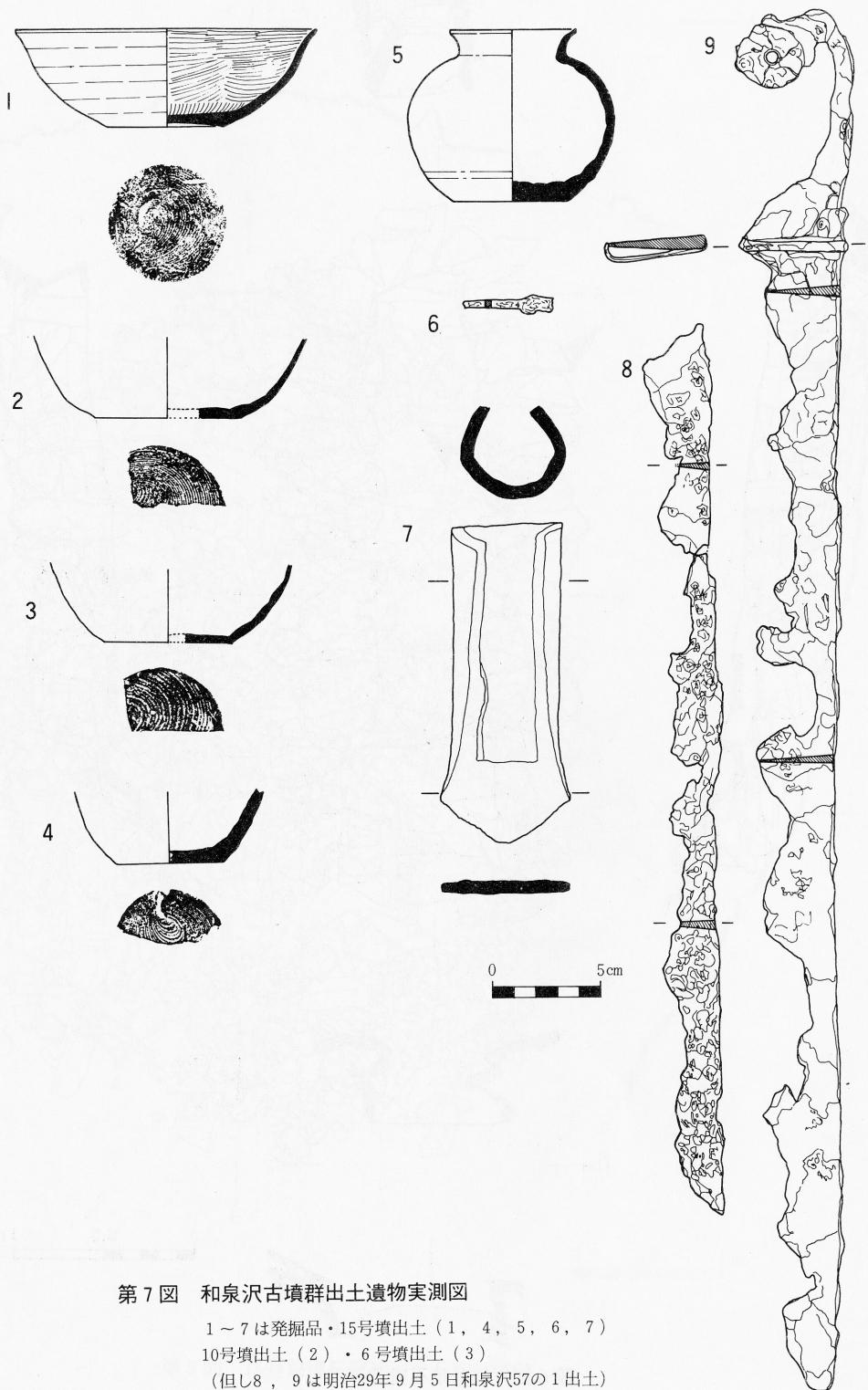
第4図 10号墳実測図



第5図 15号墳墳丘実測図と石室位置図



第6図 15号墳石室実測図



第7図 和泉沢古墳群出土遺物実測図

1~7は発掘品・15号墳出土(1, 4, 5, 6, 7)

10号墳出土(2)・6号墳出土(3)

(但し8, 9は明治29年9月5日和泉沢57の1出土)

---

---

宮城県桃生郡河北地区文化財調査報告第1集

和 泉 沢 古 墳 群

昭和47年10月10日 印刷

昭和47年10月15日 発行

発 行 河 北 地 区 教 育 委 員 会

宮城県桃生郡河北町相野谷字飯野川町121番地

印 刷 株式会社 東 北 プ リ ン ト

仙台市立町24-24 T E L (25)6466(代)

---